

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 小出 雄太郎

論 文 題 目

Clinical outcome of definitive radiation therapy for superficial esophageal cancer

(T1N0M0 食道癌に対する根治的放射線治療の治療成績)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

後藤 秀実



名古屋大学教授

委員

柳野 正人



名古屋大学教授

委員

小寺 泰弘



名古屋大学教授

指導教授

長 紀 邦 之



論文審査の結果の要旨

今回、T1N0M0 食道癌に対する根治的放射線治療の長期成績を分析し、治療の有効性と安全性、および予後因子を確かめた。愛知県がんセンター中央病院で治療された123名を対象に、予防照射を省略した60Gy/30回の照射を行っている。100名で化学療法が併用され、85%はFP療法が施行された。5年全生存率は76.8%であった。背景因子について単変量、多変量解析を行った結果、照射単独、重複癌、まだら食道(ヨード不染域の多発)が有意に生存の予後不良因子であった。再発は計55名で局所再発42名、領域再発10名、遠隔再発3名。局所再発が最も多かったが、そのうち30名では救済治療として内視鏡的切除(ESD/EMR)、6名は手術が行われ、全例が制御されていた。予防照射が省略されていたが、領域再発は少なかった。晩期有害事象はG2の心嚢液貯留が2名、G3の放射線肺炎が1名のみであり、G4以上や治療関連死は認めなかった。本研究から、予防照射を省略した化学放射線療法は有効性、安全性ともに高いことが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. T1b 症例の内視鏡単独治療の報告では5年の領域再発25.7%に対して本研究では10.4%であった。内視鏡治療と比べると放射線治療は局所治療とはいえ原発巣近傍のリンパ節領域は治療野に入ること、また化学療法が併用されていることが影響していると考えられる。
2. 再発例のなかで救済手術が施行された症例は全7例で、1例の吻合部狭窄と1例骨髄抑制を認めたが、その他重篤な術後合併症や治療関連死は認めなかった。適応は限定的だと思われるが、手術治療も救済治療として重要な役割を持つことが示唆された。
3. 本研究と調査時期は異なるが、同施設の後方視的比較研究からはT1N0M0 食道癌の手術治療と化学放射線療法は5年生存率がそれぞれ89.6%、83.1%であり統計学的有意差を認めなかった。ただし、再発率はそれぞれ15%、45%と化学放射線療法のほうが多かった。化学放射線療法後の定期的な観察と救済治療が重要と考えられる。

本研究は、T1N0M0 食道癌の化学放射線療法の有効性や安全性について、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	小出 雄太郎
試験担当者	主査	後藤 秀実	柳野 正人	小林 弘
	指導教授	長 紀 州		
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. T1b症例の領域再発が内視鏡単独治療の報告に比べて少ない理由はなにか。 2. 再発例に対する救済手術の安全性は問題なかったか。 3. T1N0M0における手術と化学放射線療法の成績のちがいについて。 <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、放射線治療学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				